

錢の花

花登

筐

二

花

花登筐

中

銭の花

(一)

三八〇円

第一刷発行 昭和四十五年二月二十日
第十二刷発行 昭和四十七年二月十日

著者 花登 筐

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一―二一―二二 郵便番号 一一二
電話 大代表東京(九四五)二一―二一 振替東京 三九三〇

印刷所 豊国印刷 製本所 大進堂製本



© 花登 筐 1970

但丁本・落丁本はお取り替えいたします。

目次

女体

5

恐怖

49

転機

84

黒い灰

140

再建

200

裝幀
題字

村山豐夫
望月美佐

錢
の
花

中

女体

福原屋の近くに、たった一軒、土産物屋があった。

古橋と言う土産物屋で、近頃、増えた旅行者のために、土産物を売っているのである。

とは言え、土産物の数は少なかった。古橋の主人と言うのが、手先が器用なため、木彫りの人形や掛額などをつくって並べたり、古道具のたぐいもあったりしたが、食べものと言えるのは統制で殆どなく、乾燥バナナが、わずかにある位であった。

だが、裏へ廻れば、乾魚がこっそり売られ、夏みかんもあった。

客の中には、現金で買う客もあれば、洋服や、着物類を持って来て、乾魚と交換する客もあった。古橋は、又、その品物を、漁師や土地の者と交換する、言いかえれば、店をかまえた闇ブローカーのようなものであった。

この古橋に美代子と言う娘がいて正子と女学校の同窓生であった。加代が、訪ねたとき、美代子は、店に出ていた。

美代子は、加代を見て、ちょっと複雑な顔をした。正子から何か聞いているのかも知れなかった。「あの、いつも、正子さんがお世話になっています」

「何か用ですか」

類は、類をもって集まると言うが、美代子も棘のある女であった。

「正子さん、昨日夜、こちらへお邪魔してませんでしたでしょうか」

「あら……」

美代子は、変な顔をした。

「正子ちゃん、昨夜は八時頃、帰りましたけど……」

家の中から、しわの目立つ中年の女が出て来た。美代子の母親ではないだろうか。加代は目礼した。

「どこかへ行くと言ってませんでしたやろか」

「さあ……」

美代子は、言葉を濁した。横から母親が、美代子に、口を出した。

「美代子、もし何だったら言っておけた方がいいんじゃないかい」

「何言ってるの。違ってたらどうするの」

「でも、心配してられるんだから」

「正子ちゃんの話だと心配なんかしてらってないようよ」

美代子は、吐き捨てるように、加代を見て言う、奥へ入って行った。

「奥さん。何かあったんですやろか」

奥さんと言われて、氣をよくしたのか、母親は、上り框に座布団をすすめて、

「あなたのことは、大層評判で、山水館さんはいとお嫁さんをもらったと、皆、言ってますよ」

おせじらしいことを言った。加代は、改めて初対面の挨拶をした。

「で、何ぞ、正子さんの心当たりは」

「はい、それがですのう」

美代子の母親は、意外なことを言った。

正子に、男が、出来たのではないかと言うのである。

「男のひとつが……」

「いえねえ。はっきりは分かりませんが、家へ来る闇ブローカーでね、中西と言う東京から来る男ですがね、その中西と、正子さんは、いつも親しそうにしゃべっているんで、間違いはないかと話してたんですよ」

「それで昨日は」

「その中西が昼から夕方までいましてねえ、あれは、七時頃でしたか、あんまり長くいて、二人でしゃべったり、中西が持ってきたパンを二人で食べたりにしているんで、私も、うちで何か間違っても起こったら大変だと思ひましてねえ、中西に、帰るように言ったんですよ」

中西が、帰ったのは、午後七時すぎ、それから、正子が少しいて帰ったとすると、ひょっとして、その中西なる男と約束でも出来ていたのかも知れない。

「で、中西ってひとは、どこのひとで」

「特攻隊くずれの若い男で、一寸したい男ですが、家はどこにあるのか、東京としか聞いていませんよ」

「そうですか」

加代は、それでは、仕方がないと思った。

八時三十分が、熱川から伊東へ向かうバスの最終便、それに乗ったとしたら——。

礼を言つて帰る加代の足取りは重かった。

もし、家が面白くなくて、正子がその中西なる男のところへ走つたのなら、その責任は、自分にある。

もう少し、打つべき手があったのではなからうか。

あんな正子だけに、つい、近寄りがたくて、何も聞いてやれず、はれものにさわるようにしていたが、心の中では、案外、加代が、接していくのを待ち受けていたのではないだろうか——。

もしそうだったら、加代は、悪いことをしたのである。

（帰っていてくれたら）

そう望んで、山水館の戸口を開けたが、正子は帰っていずに、客が来ていた。

春江が、バスの停留所まで行つて、迎えて来たと言うのである。

加代は、急ぎ足に、儀之助の部屋まで行つて、手をついた。

「昨夜、古橋さんところから、八時位に帰られたそうです」

儀之助は、返事の代わりに、咳こんで、

「あの子は、みんなに、冷めたくされて、海へ飛びこんだのじゃろう」

と、とげのある言葉を使った。

加代は、そのまま部屋から出た。

「おい客だぞ……何している」

台所から正五の声がとび、春江も、忙しそうに働いていたが、誰も正子のことには聞こうとしなかつ

た。

正子は、その頃、東京にいた。

高田の馬場の、駅前から、坂へのびる闇市の裏側の、旅館にいた。

ここいらあたりは、爆撃をうけて、殆どやられたとの話だが、復興も早かった。その中で、この旅館だけは、焼け残った戦前の建物のせいか、妙に古びていた。

正子は、その古びた天井のシミを見ながら、東京にいる実感は湧かなかった。

あまりに刺激の強かった昨夕からの出来事であったからである。

あの古橋の店で、東京から砂糖や石鹼を持ってくる中西を一目見たときから正子の心はふるえた。彫りの深い顔に、無精髭が濃く、野性的であった。

何よりも、正子の心を射たのは特攻服に身を固めて、腰のベルトに、小さな人形を吊っている姿であった。

「戦友たちと、俺は飛んだんだ。アメ公の戦艦に、ぶち当たってやろうってね。だが、途中、エンジンの故障で、引き返さねばならなかった。戦友たちは、死んじまったが、俺は、のめのめと生きていく。俺は、ピストルで死のうと思って……」

中西の話すことは、暗かったが、正子の魂は、ふるえた。まるで、心の中に食い入るような中西の話であったからである。

山水館に加代が来てから、好調な売り上げを見せ、正五はもとより、春江までが、加代を慕い、儀之助さえも、その売り上げにえびす顔をするので、正子は、山水館にいる時間が苦痛であった。とは言え、十五歳頃から母親代わりとして、家の中を牛耳っていた正子が、今更、加代と共に働けなかつ

た。

加代を排斥しようとして果たせなかった正子は、外で時間を過ごすことになって、古橋へ行ったのである。

そして、そこで、中西を知ってから、中西の姿を求めに行ったのである。

最初は、さほど、そうも思っていなかった正子に、美代子の、

「あんた、中西さんに気があるのね」

こんな言葉が、火をつけた。正子が、中西を好きだと思いこむのに時間はかからなかった。

だが、正子は、中西と、肉体関係はおろか、手を触れ合うこともなく、愛の言葉を交わしたこともなかった。

ところが、昨夕、とりとめのない話を交わし、時間のたつのを忘れていた正子と中西に、美代子の母が、暗に帰れと言わぬばかりの言葉をはいた。

それが、中西のニヒルな神経にひびいた。

「あのばばあ、俺たちの仲をやいていやがる」

若者の論理は飛躍した。

「俺は、帰るぜ」

そのとき、中西は、立ち上がったのである。中西の目は、怒りに満ちていた。

(ひょっとしたら、このひともう来ないかも知れない)

正子は、そんな気がした。

中西が、リュックサックをかついで、挨拶もしないで表へ出るのを、正子は、古橋のおかみの目もあつておくれ表へ出た。

中西は、暗い道に立っていた。待っていてくれと言ったわけではない。だが、中西が、待っていてくれることは、心の中で望んでいた。

そして中西が待っていてくれたと言うそれだけのことで、正子は中西に愛情があることを感じていた。

「もう、熱川へは来ないの」

「ああ、伊東だって、下田だって、商売には困らないよ」

正子は、来て！　と言う言葉が、口の端にまで出て来るのを呑みこんだ。

「おい！　俺は、好きだぜ」

やにわに中西の腕がのびて、正子の手をつかんだ。

処女の本能は、思わず体を硬くするが、中西の力は強かった。

あつと言う間に、正子の体は、中西の腕に包まれた。

男くさい汗に濡れた中西の唇が正子の唇に近付いてくる。齒が、音を立てるようにガチガチなる唇に、中西の唇があつて、正子の体が、火のようにあつく感じた。

中西は、益々力をこめて抱きしめる。正子の両の乳房が、押しつけられて、息の出来なくなるほど苦しい。

どこかで、宴会をやっているのか、騒ぎの声だけがそんな中でも聞こえてくる。

「おい、東京へ行こう」

「えっ？」

思いがけない中西の言葉が、正子の耳に、遠い言葉となっておそって来た。

「これから一緒に行くのだ」

「……………」

正子は、ためらった。ひとときでももう熱川には、居たくない正子である。

とは言え、今すぐ東京へ行くことは、恐ろしかった。

しっかり者と言われた正子だが、熱川の山水館の中では、あんな風に強くなれても、一步外へ出ると、人見知りもする正子である。

「どうだ。行こう」

抱かれた正子が、そらせた目に白いものが映った。

一瞬ハッとした正子の傍を、白いゆかたの女が通った。

顔見知りの福原屋の女中であつた。

さっきから、二人のこの姿を見ていたのはたしかであつた。

「行くわ」

とたんに正子は、答えていた。

正子が、東京へ行く決心をしたきっかけは、そのたったひとつのことであつた。

中西に抱きしめられていた姿を、土地の者が見ていたとすれば、その噂が熱川中に流れるのに時間はかからない。

噂が流れることは、平気だった。山水館は儀之助から、正五、春江とたえず噂のネタになっていた。

馬賊芸妓に尻の毛まで抜かれた儀之助、性的不具者と言われた正五、恐ろしい殺人未遂娘と言われた春江――。

そんな噂のネタばかりの家族であるからには、何と言われようと、山水館の誰にも、気がねはなか

った。

だが、いやなのはひとの見る目であった。

あの探ぐるように、それでいて何もかも知っているぞと言わんばかりの嘲笑と、侮辱を含んだ目をうけたら、たまらないであろう。

何故なら、他人の噂が出るたんびに、正子もあんな眼で見えていたからである。

「なあ、行こう」

中西は、うながした。

「でも、私……何も支度をしてないわ」

「支度なんかいらないうぜ。東京へ行けば、何でも買ってやる。俺は顔利きだ」

「二人歩くの、うるさいわ。バスの駅で待っていて、すぐに行くから」

「本当だな」

「うん」

正子は、何故おくれてバス停まで行くと言ったのか、それは、自分でも分からない心であった。

どうせ、接吻をしているところを目撃されたのだ。今更どうでもよいではないか――。

だが、おくれて行くと言うところに、これからしようとしていることが、誰にも知られたくない秘密のことであると言う心が、正子にそう言わせたのかも知れない。

誰かに知られて、仮に山水館へ知らされたとしても、とめる時間もないことなのに――。

最後のバスが出るまで正子は、古橋で、四十分ほどいて、そのままバスの停留所へ向かった。

全くの着のみ着のままである。

汗で、下着も濡れ、下駄は、チビっていた。

だが、正子は、そんなことに羞恥はもたない女性であった。

山水館の座敷が埃をかぶり、台所の食器の不潔さも、正子のそんな性格が、そうせしめたのである。

最終のバス停には、幸い土地の者は待っていなかった。

それでも、中西が乗って、買い出し客が二、三人乗ったあとに、正子は、乗った。

バスは満席であった。中西は、二枚、バスの切符を買ったが、正子は、中西の傍にいなかった。吊り皮にぶら下がつて、正子はこれからのことをふと思った。

とは言え、加代が大阪からこの熱川へ飛びこむように嫁に来たときとは、かなり異なっていた。

二人とも未知の世界へ飛びこんだ。バスにも乗り、夜汽車にも乗った。

加代は、逃げるように道頓堀の小屋を出たが、母のことは、心配であった。少なくとも、自分が出ることで姉夫婦の生活の平和を望んだ。

そこに自己犠牲の姿があった。

だが、正子は、犠牲と言う言葉さえ知らなかったし、父の儀之助の心配もしていなかった。

熱川の灯を見て、山水館を思ったものの、少なくとも感傷はなかった。

あったとすれば、かつて、自分が君臨していた家を、捨てねばならぬ悲しさであった。

その悲しさは、口惜しさに共通していた。

朝になって、自分の姿が、山水館になかったとき果たして誰があわてるだろうか、それを思ったのである。

あわてて、探し廻るのなら痛快である。自分の価値を改めて見出すであろう。

正子は、山水館のわずかな人間を追って見た。